

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第 656 号 平成 25 年 12 月 9 日

すり抜けた危険

先月（11月）下旬の事になりますが、エイズウイルス（HIV）に感染した男性の血液が、患者2人に輸血され、その内の一人にHIVが感染していたという報道があり、驚かれた方も多いと思います。

私も、ニュースを見て、我が目と耳を疑いましたが、それ以上に、献血した男性の身勝手な行動に怒りを覚えます。

私は、献血が半ば趣味みたいなもので、しばしば暇を見つけては献血しています。その際必ず問診票に、その日の体調や睡眠時間、食事時間等の他、HIV感染の危険がある性的行為の有無や、HIV検査が目的でない事等を申告する事になっていますが、問題の男性は事実と異なる申告をしていたものです。

日本赤十字社では、2004年（平成16年）に検査を強化して以降、HIV感染者の血液の使用が判明したのは初めてとの事です。今後、現行の20人分を纏めて調べる方式から1人ずつの個別検査体制を来年夏までに実施するとしています。

しかし、HIVの感染初期は血液中に多くのウイルスが存在しており、最も鋭敏な検査法を用いても、感染力を持つ血液が検査で検出されない時期があるとの事です。ですから、献血者に正直に申告していただく以外に、HIVに感染した血液のすり抜けを完全に防止するのは難しいと思われます。

さて、12月1日は「世界エイズデー」です。この「世界エイズデー」は、世界におけるHIVのまん延防止と患者や感染者に対する差別、偏見の解消等を目的に、WHO（世界保健機関）が1988年に制定したもので、毎年この日を中心に、世界各地でHIVに関する啓蒙、啓発活動が実施されています。

患者の多いアフリカ諸国はじめ各国においては、新たな治療法やHIVに対する啓蒙、啓発活動が功を奏し、新たな感染者や発症者は確実に減少しつつあるといわれています。こうした中であって、我が国は世界の趨勢に逆行し、感染者数、発症者数共に増加の傾向にあり、厚生労働省が調査を始めた1985年（昭和60年）以降で初めて、HIV患者が2万人を超えるという極めて深刻な事態となっています。

HIVに関しては、感染を予防する事が可能であり、また、仮に感染したとしても治療法は劇的に向上し、発症を抑えることが出来る様になっています。にもかか

わらず、日本でH I Vの感染者が増加傾向にあるのはどうしてなのでしょう。

その背景には、

- 依然としてH I Vに対する認識が甘い、あるいは他人事のように考え関心を持たない、
- 血液検査を受ける勇気に欠ける、あるいは保健所まで出掛ける事が面倒と感じている、
- 他人に迷惑をかけない、特に、パートナーの命を守るという意識の欠如

等が考えられますが、いずれも無責任の誹りは免れません。

H I V感染を承知していながら他人にH I Vを感染させるというのは、許されざる行為です。特に、H I V感染の恐れがあるので献血しないというのならまだしも、知らぬふりを決め込んで献血するという神経は、理解出来ません。

今後、検査目的の献血を防ぐ為には、献血の窓口では、これまで以上にH I V検査を目的とする献血は受け付けていない事、従って、検査の結果は本人には通知しない事を明確に伝える必要があると思います。

また同時に、保健所においては、夜間や休日の受付を増やす等、H I V検査がより受けやすくなるよう工夫改善する必要もあります。

献血は、輸血を必要とする患者の為に、多くの人々の善意によって成り立っています。折角献血された血液が、一部の人間の心ない行為によって「安全」という信頼を失う事になれば、患者にとっては勿論の事、献血者にとっても誠に不幸な事だと思います。(塾頭：吉田 洋一)